

# 農業土木を支えてきた人々

## 小倉少介，三省父子

— 野中兼山とともに新田開発に尽力 —

河上 親\* 片岡 正 法\*\*

### I. はじめに

戦国時代が関ヶ原の戦い（1600年）を頂点として次第に終りを告げ、徳川300年の支配の礎たる幕藩体制が築かれようとする黎明期にあつて、ここ四国土佐でも長宗我部氏にかわつて、遠州掛川より山内一豊公が24万石の国主として入国（1601年）し、大高坂山に城を築き、高知城下町を開設した。

その後、慶長10年（1605年）に一豊公が没し、実弟の子忠義が第二代の国主となつた。以後10年を経て大阪冬の陣、夏の陣が起つて、徳川氏の江戸政権は確立するのだが、二代忠義の時代には、このように戦国の余波がまだ吹き荒れていた。

土佐藩の家老職執政野中兼山や、参政（仕置役＝次官）小倉少介、三省父子らが、殖産興業、新田の開発、教学等にわたり、千歳不朽の治績を挙げたのはこの時代のことである。以来340余年、今日なお県下あまねくこの恩恵に浴し、その遺徳を敬仰している。

### II. 野中兼山と小倉父子について

この欄の主役は、小倉父子ではあるが、彼らが補佐した野中兼山を抜きにして彼らに言及することは困難である。このため、逸脱しない範囲で野中兼山のことを併せて述べてみたい。

兼山は、藩制時代山形の上杉鷹山、岡山の熊沢藩山と並び天下の三山と謳われた、当時日本的に有名だった大政治家、一大土木技術者である。この兼山が政務をとるにあつて協力した者の数が多いが、最もよきパートナーとして知られているのが小倉少介（助とも書く）、三省父子であつた。峻烈短気な兼山に対して、老熟剛直な少介と温厚篤実な三省は共に制御の役をつとめ、兼山独

走の良き抑制力であつた。三省が兼山の厳しい政治をいまして、「古の功臣、終りを善くして福祿子孫に及ぶは皆徳量寛大にして仁を垂れ、恵を布けるなり。若しそれ厳刑重罰は一時の効をなすといえどもその積怨蓄禍亦自ら全き者あらず、子これを熟慮せよ」と言つたといわれる。もともと兼山の父、野中勘解由は初代藩主一豊公との約束で土佐の幡多郡下で2万9千石の城主に内定していたが、藩主交代の際のトラブルで気短かにも出奔し、上方で浪々とし、当地で兼山が生まれてまもなく病没しているが、この気短かで、激しい気性の父の血を兼山は強く受け継いでいる。母はそれを心配し、ことあるごとにさとし、厳しく兼山を養育していた。これを堺の町で見出したのが小倉少介で、兼山母子に土佐へ帰ることをすすめるとともに、当時家老職であつた野中直継に養子として迎えるようにすすめたとの説が巷間に伝えられている。時に兼山13才、寛永4年（1627年）のことであつた（なお、兼山は初代藩主の妹の孫に当る血筋である）。

一方、小倉少介は近江の出で、父は高島大助、蒲生氏郷に仕えて戦死、そのため幼少のころは母方の伯母小倉氏に養われ、のち山内の家臣奥氏の養子になっている。

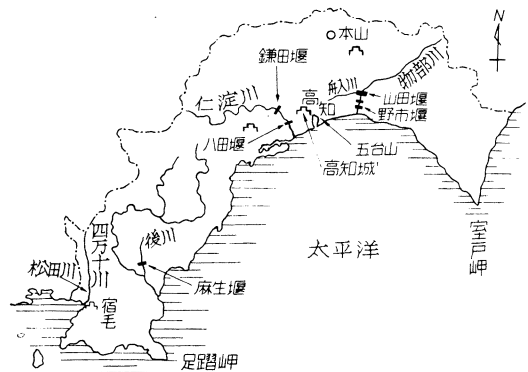


図-1 高知県位置図

\* 高知県土地改良事業団体連合会〔元耕地課長〕（かわかみ ちかし）

\*\* 高知県農林水産部耕地課（かたおか まさのり）

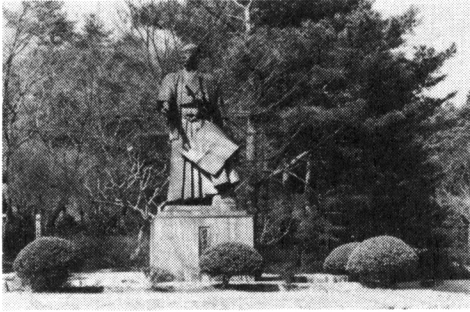


写真-1 野中兼山銅像（長岡郡本山町）

その後、幼時養育の恩を思い、伯母の姓の小倉を名乗ったという。三省はその子で、南学者としても名高い。なお、少介の四男弥三右衛門政重は豊前15万石小倉城主であった毛利氏の養子になっている。幕末、中岡慎太郎らと共に勤王の志士として活躍した毛利恭助はこの子孫である。余談ながら、「土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買おうを見た」……という「よさこい節」でおなじみの鍔掛屋の娘お馬さんが幕末この小倉家に女中奉公に上っている。

小倉少介、三省父子は仕置役として共に二代藩主忠義に仕え、年少執政兼山の政務補導役として矢面に立ち、また後楯となったのである。

ところで、兼山の養父直継は36歳で奉行職に任ぜられ、宝永期にかけて藩財政に苦心している。この事業は、仕置役小倉少介も関与しているが、兼山施策の前提となっている。たとえば、元和の改革では少介は土佐の林産資源に注目、いわゆる50年輪伐制を創始し、大きな実績を上げ、兼山によってこれが踏襲され、留山、留木制（乱伐を規制する制度）と相まって土佐藩林制の中核となる。また新田開発についても、養父直継がまず野市（鏡野）で着手し、少介が推進役となっている。家中の何者かの落首に「昔より曇り捨てたる鏡野に 水金入れて磨ぐは少介」というのがある。「水金入れて」とあるのは「水と費用を投じて」の意で、水金は「水銀」のしゃれである。曇った鏡を磨ぐのに水銀を用いたことによるものである。また「とぐは」は小倉の語呂合わせとなっている。これはもちろん少介をもてはやしたものである。

寛永13年（1636年）直継は病没し、兼山はわずか23才で家督を相続し、奉行職を継いだ。この際も小倉少介は才能豊かな若い兼山が奉行職を勤めることを藩の要路の人々に強く推挙した。このことは若い執政に対する重臣たちの異議を封じる力を持っていた。覇気と理想の塊り

のような兼山を少介は愛し、思慮深く補佐をした。職を三省にゆずって五台山の山すそに隠居してからもじっと兼山を見守ったのであった。

このように兼山は養父の政策を受継ぎ、少介を補佐役として発展させていったが、その思想のバックボーンとなったのが「南学」である。

### III. 兼山、三省と南学

もともと兼山は22、23歳まで当時の武士の教養とされた禅学を志していたが、江戸表に遊学中であった小倉三省より儒書を送付され、すすめられて、これを契機として深く打ちこみ、今の高知城追手門付近にあった自分の屋敷を好学な青年に開放して勉学させる他、長崎、堺また、遠く中国からも直接文献を取りよせる一方、谷時中を中心として小倉三省、山崎闇齋らと共に儒学研修グループをつくり、また自ら印刷物を発刊し南学の普及につとめている。

南学とは、儒学（朱子学）の一派で、孔子の教えをもとに朱子がこれをさらに発展させ、武士階級には道德思想を養わせ、その政治に理論と徳性を加え、領民には封建秩序を教化するものである。その特徴は、窮理ではなく実践であった。

兼山の実行力、自信はこうした儒学の精励からきている。経国済民の道だという崇高な自信が大事業の立案、実行をさせたのであった。ここにも小倉三省の学問的な指針を兼山に与えた功績がある。その後、土佐藩の尊王思想はこれによって芽生え、維新の際に開花した。思想的にも後世に及ぼした兼山や三省の影響はまことに大きなものがある。

### IV. 新田開発

近世初頭は、幕藩領主の領国経営の重要な施策として全国的に新田開発が進められた。開幕当時の全国石高は1,850万石で、50年後の1645年には26%増、100年後の元禄10年（1697年）には41%増の2,609万石となっている。面積では慶長年間の163万町歩が、享保年間には297万町歩に増加し、蛇足ながら明治6年では413万町歩となる。これは、天下泰平となり、築城のための石垣技術が大河川堤防工事等に取り入れられ、耕地拡大が進んだものである。

土佐藩でも、「長宗我部地検帳」による石高は24万8,300石余であり、これを本田と称しているが、これに対応する新田開発の状況を貞享元年（1684年）と元禄6年（1693年）の土佐国領知有高および元禄土佐国高表から表-1に示した。これによれば、藩政初年から80年間

表-1 領地・石高の推移

貞享元年(1684) 土佐国領知有高		元禄十佐国高表 地弘帳 (元禄6年) (長岡郡は一部、幡多郡は東分を欠く)			
地高	摘要	郡別	本田(石)	新田(石)	新田開発率
石余		安芸	21714.5	12256.0	56.4
248300	長宗我部地検帳の高	香美	31252.9	23903.2	76.5
6050	慶長5年~寛永11年出来新田	長岡	26738.7	13451.7	50.1
4830	寛永12年~正保3年出来新田	土佐	20096.5	14544.9	72.4
70200	正保4年~延宝出来新田	吾川	20872.9	7121.2	34.1
合計 石余		高岡	56114.0	25453.2	45.4
329380		幡多	18278.3	4261.5	23.2

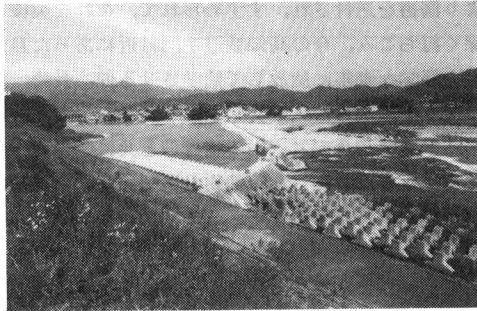


写真-2 物部川山田堰 (撤去前)

に8万1,080石, 32.7%の増額を見ているが, とくに正保以降の7万200石は野中兼山の新田開発の成果を示すものである。山内氏入国以来土佐藩では米不足に苦しみ九州から米を購入したり, 幕府から拝領米を重ねたことが当時の文献で残っているが, この新田開発によって米年貢の少ない土佐藩の財政基盤の強化が図られた。このうち生存中の兼山の業績としては, およそ3,000町歩の新田開発により, 約3万石の増収と見込まれる。次に開発の進行状況を兼山の施政(約30年間)の3段階に分け, また藩制の最重要課題であった用水建設について述べてみよう。

兼山施政前期は, その領地長岡郡本山地方(図-2)と, 高知平野東部物部川流域に開発が行われ, 中期には, 高

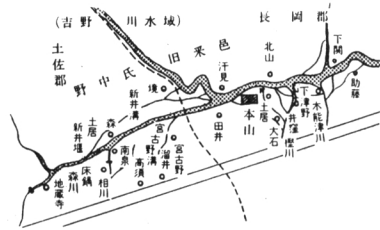


図-2 本山付近の諸堰と溝渠

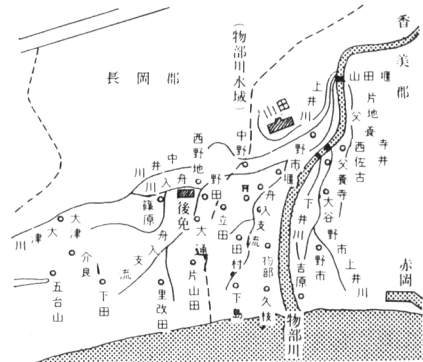


図-3 山田堰と香長平野の溝渠

知平野西部仁淀川流域が開田事業の中心になっている。末期はさらに高知平野東部の仕上げと全土佐への拡大がみとめられる。しかし, なんとといっても, その中心は高知平野東部物部川流域である。こんにち土佐の穀倉地帯と称せられる香長平野の用水源は物部川であるが, ここには山田堰と野市上井堰, 野市下井堰の三つの堰が設けられている。(表-2, 図-3)

堰体は四ツ棹工法といわれる構造(図-5)でこれら三堰に使用した松材は11万5,000余本, 石材3,690坪といわれ, その規模の大きさが知られる。ことに山田堰(写真-2)が有名で, 寛永16年(1639年)に着工して関係する水路も含め, 寛文4年(1664年)に完了するまで実に26年間もの歳月を必要としている。この堰に対する兼山の熱意

表-2 山田堰, 野市上・下井堰概要

堰名	場所	構造	水溝および灌漑耕田
山田堰	物部川東岸, 片地神母の木より西岸小田島のコイチに至る	長さ180間, 高さ約1間, 幅6間, 木石両材使用	西岸上井川, 正保2年竣工, 幹流延長香美平野1里7町, 灌漑耕田126町7反6畝。中井川, 寛永16年竣工, 延長2里19町, 耕田香長平野434町6反4畝余。船入川, 万治元年竣工, 延長2里24町40間, 耕田香長平野において1,109町2反余。大津川, 船入川の支流, 延長1里10余町, 舟路に利用せられる, 水位低きために灌漑には適せず。東岸父養寺井(一名上井) 明暦元年竣工延長1里10町, 灌漑耕田42町余。
野市上井堰	物部川東岸, 片地の町田より同村平木の戸に至る	長さ60間, 幅8間, 高さ1間, 木石両材を使用	野市上井, 正保2年竣工, 堰から東方西佐古, 父養寺を経て野市に入る水域1里, 耕田約460町余。
野市下井堰	物部川東岸, 西佐古上島より西北に向って築く	長さ150間, 幅8間, 高さ1間, 木石材使用	野市下井, 寛文4年竣工, 西佐古, 父養寺, 深淵を経て野市に入る。延長1里10町, 耕田200町余。

注) 「偉人野中兼山」参考

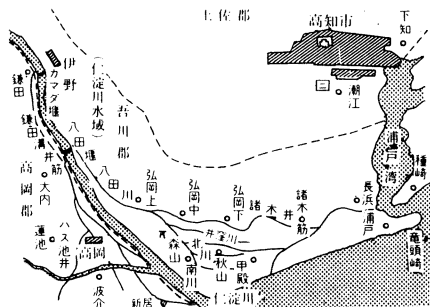


図-4 鎌田, 八田堰と高吾平野の溝渠

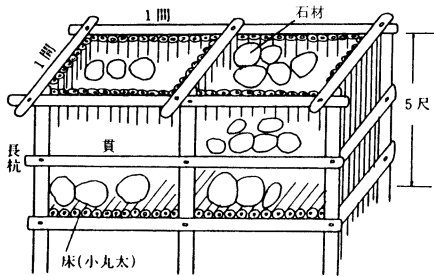


図-5 四ツ杵工法 (推測図)

を伝えるものとして、次のような話が伝承されている。ある日、夕方から降りはじめた豪雨のため、造りかけの堰や堤防がこわれるかも知れないと心配した小倉三省は、夜の明けるのを待ちかねて馬で現場に駆けつけた。案の定、物部川は濁流がうずまき、堤防は水の勢いでゆるんでいた。ふと見ると、みのかさを付けた者がひとり、堤防の上を走り回っていろいろと調べていた。近寄って見るとそれは野中兼山であった。二人は造りかけの堰や堤防の無事を抱き合っただけにして喜んだという。この山田堰で塞がれた水は東岸に父養寺井、西岸に上井、中井、舟入の三つの流れをつくった。灌漑面積2,000町歩、ことに舟入川は下流の天津川につながって新しい水上交通路となり、物資交流の大きな経済的役割を果たした。余談ながら、この山田堰も時の流れには抗せず老朽化がすすみ、防災上問題があるとして昭和58年3月撤去され、上流700mの県営かん排事業による近代的な頭首工がその役目を引継いでいる。

また物部川と並んで仁淀川の水流を利用することを兼山は忘れなかった。承応元年(1652年)に八田堰を設けて東岸吾川郡南部平野862町歩を開発し、同3年(1654年)には鎌田堰を造って西岸高岡平野687町歩を灌漑した。その概要を表-3に示す。

八田堰の規模は、物部川の山田堰に匹敵するもので、工事は困難をきわめている。流下する水勢のために工事

表-3 八田堰, 鎌田堰概要

堰名	場所	構造	水溝および耕田
八田堰 (弘岡堰)	仁淀川, 東岸吾川郡八田より西岸高岡郡大内に至る	延長228間, 幅13間3尺, 高さ1間4尺, 木石両材使用	吾川郡八田川本流, 延長6里14町25間, 耕田862町2反7畝, 主要支流諸木井筋2里14町, 耕田414町7反, 川窪井筋, 延長19町, 耕田48町2反, 南川井筋延長25町, 耕田191町6反, 北川井筋延長24町, 耕田99町4反
鎌田堰	仁淀川, 東岸吾川郡伊野より西岸高岡郡川内鎌田の御茶屋床に至る	延長300間, 幅10間, 高さ7間, 木石両材使用, 筏越を作る	高岡郡鎌田井, 本交合して延長5里24町32間, 主要支流蓮池井延長1里12町21間中島井29町58間, 灌漑耕田687町1反7畝

注) 「偉人野中兼山」参考

表-4 麻生堰, 岩田堰, 河戸堰概要

堰名	場所	構造	水溝および耕田
麻生堰	幡多郡麻生, 四万十川支流, 後川に設ける。	長さ90間, 幅6間, 高さ2間, 木石材	4ヶ村溝, 延長1里21町25間, 秋田, 安並, 佐岡, 古津賀の流域を灌漑, 耕田2町4反
岩田堰	後川, 東山村岩田カイロク	長さ25間, 幅5間, 木石材	藤地溝または岩田川, 延長約1里, 流域の耕田64町4反歩
河戸堰	松田川(牛背川)宿毛の東和田城ケ下		牛背川掘割工事, 延長15町23間, 樋3カ所, 耕田16町6反1畝

注) 「偉人野中兼山」参考

が阻害されるのを考慮した結果、兩岸から河中に縄を張って水勢の強い位置を確かめ、その抵抗をさけながら工事を進めたとされる。また岩盤深く打ちこまれた基礎杭は、県営かん排事業による改修時に判明したが、機械力でもなかなか抜けなかったという話が耕地課OBの方から伝わっている。

日本最後の清流と、最近とみに有名な幡多郡の大河、四万十川水系の後川に築かれた麻生堰と岩田堰、松田川の水をせいて掘った坂の下水路も兼山の遺構として今に残っている(表-4)。麻生堰は中央部が水流方向に湾曲している糸流しという兼山独得の工法であると説明されている。また坂の下の水路(堀割)については、次のような俗謡が伝えられている。「雪やこうれ、あられやこうれ、荒瀬の川が留まれやこうれ、これは工事が荒瀬まで進んだころ、厳冬と難工事に苦しんだ役夫たちが、休業を請願したが、兼山に「川の水が凍って流れが止まったら休んでよい」として、休業が聞き入れられなかったのをうらみとして歌にしたものであるという。

## V. おわりに

兼山の施政の前、中期が、小倉父子らの合議によって動いたのに対し、後期にはこれらの諸士が多くは死に、彼の独裁は強化された。とくに奔馬のような兼山の抑制力であった小倉父子の死は兼山にとって大きな痛手であった。休むことを知らない強制的な新田開発は領民を夫役過重に追いこんだ。これら領民の生活の苦しみは兼山の政策失敗によるものだと、政敵から指弾され、若き三代藩主忠豊の信頼もうすらず、兼山はいさぎよく身を引いて土佐山田町中野に家族とも別れて隠居した。中野は彼の造った舟入川に沿う静かな町である。ここでわずか3カ月を送った後、病死している。寛文3年(1663年)12月15日のことで49才であった(憤死、毒殺の説もある)。残された遺族に対する追罰弾圧は陰惨きわまりないのであった。すなわち、野中家はとりつぶされ、妻や幼い子供たち8人は宿毛まで流され、男子が死滅するまでの40年もの長い間幽閉されたのである。

この間の事情は、本県出身の作家大原富枝女史の書かれた「<sup>えん</sup>宛という女」に詳しい。

長い栄光のあとで、屈辱の日々を送った兼山、また、その家族の心中はいかばかりであったろうか。

野中家の家系は野中宛を最後として絶えたのである。

一方小倉父子の方であるが、まず少介は承応2年(1653年)老令により、その役務を退き、高知市五台山のふもとに隠居したが、その際には、大小の刀以外に何も持っていないなかった。当時の高級武士としては珍しい人格的な清廉潔白の士であった。藩主忠義の病氣平癒を祈って京都の寺を巡っている際、病を得て、当地で没している。

承応3年(1654年)4月、73才のことであった。

その子三省の嘆きは深く、余りの悲嘆により同年7月少介の後を追うようにして、これまた病没している(51才)。この二人の死は、既述したように、兼山にとって大きな損失であった。

ところで少介は、藩主からとくに下賜されていた五台山山すその広大な馬場を村民に寄付し、開墾して米を作っても貢祖のかからぬように、また諸役御免の特令を藩からとりつけている。隠居所近くの熊野権現と星神社(産土神)を末長く祭らせるためであったが、村民が徳としたのはいうまでもない。このお祭りは今でも行われ、現在須崎市に在住の小倉家一門の子孫の方に確認したところ、お祭りのお初穂のお下げとして米代をお金で今でも地元民がくれているそうである。350年の時を越えて福祿子孫に及ぶということであろうか。

新田開発が藩政初期の社会的要求であり、兼山は必然的な役割りを果たしたわけだが、小倉父子と人間性を対比するとき、そこに個性の問題がからみ合って、歴史あるいは運命というもののおもしろみをつくづくと感じるものである。

### 参考文献

- 1) 平尾道雄著：「野中兼山とその時代」高知県文教協会(S45年)
- 2) 土佐史談会編：「土佐史談」107号, 108号(S39年)
- 3) 山本大編：「高知の研究 近世篇」, 松本瑛子著「地弘帳の研究」, pp. 163~164, 清文堂
- 4) 横川未吉著：「野中兼山」吉川弘文館(S37年)
- 5) 田岡典夫著：「小説野中兼山」平凡社(S54年)
- 6) 山田堰記録保存調査委員会編：「山田堰物部川水利史」土佐山田町(S59年)
- 7) 高知市町村教育委員会連絡協議会編：「土佐の巨星」第一法規出版(S54年)

[1985. 4. 11. 受稿]